様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 4 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０２７３
研究課題名（和文）　英語小説における近代表象の比較的研究――インドの英語作家を中心に――
研究課題名（英文）　Comparative Study of Representation of Modernity in Novels in English--With Special Reference on Indian English Writers
研究代表者
栂　正行（TOGA MASAYUKI）
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：10163958

研究成果の概要（和文）：本研究は、市民の近代化の過程を映し出す指標としてのイギリス社会小説に個人の近代化と社会の近代化の過程が見いだしうるように、同様の過程がインド英語小説のなかでどのように展開したかを検証した。かつての宗主国大英帝国から独立し、英語による社会小説を排出した旧植民地でも、イングランドの社会小説のたどった道を反芻するかのような現象が起きた。ナイポール研究、オクリ研究、シン研究を通じ、かつての英国最大の植民地インドにおいて近代化がいかに表象されたかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research aims to examine how in Indian novels the process of civil modernization can be mirrored as in the cases in European literature such as English literature. Almost the same process of development of novels can be found in postcolonial nations who had won independence from the British Empire. Thereby to clarify the process of Indian modernization mirrored in the novels of Naipaul, Okri, and Singh.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：インド、ベン・オクリ、クシュワント・シン、英語小説、近代

１．研究開始当初の背景
本研究は、近代表象という主題を、トリニダード出身の V.S.Naipaul の作品研究、ナイジェリア出身の Ben Okri の作品研究を踏まえ、インドの Khushwant Singh の作品を中心に研究するものである。以下のそこに至るまでの背景を説明する。イングランドにおいて、社会小説は、Jane Austen, Charles Dickens, George Eliot など 19 世紀の作家たちに見られるように、市民の近代化の過程を映し出す指標であった。社会小説には個人の近代化と社会の近代化の双方が映し出され、前者は個人の成長の過程を提示することで、架空の伝記というかたちで個人の生涯の幾多の典型を提示し、結果として、その反復を現実世界において市民にうながした。後者は社会の発達の過程を提示することで、社会像の形成にあずかるとともに、やがて近代への礼賛や、近代への反省を生む。一方、かつての宗主国大英帝国から独立し、英語による社会小説を

排出した旧植民地でも、イングランドの社会小説のたどった道を反芻するかのような現象が起きた。かつての英領トリニダードに生まれたV.S.Naipaulは、個人の近代化をイングランドへの適応（「到着」）というかたちでとらえ、自伝的作品を反芻的に発表し、個人とトリニダード社会の近代化表象とした。他方、十七歳年長のインドの作家 Khushwant Singh は、同じ英語小説を書きながら、イングランドへの適応を主題とせず、*Delhi, A Novel*（1990）に見られるように、イングランド的要素をごく一部として取り入れた上、自国インドの壮大な都市像を描き、イングランドの社会小説とは別の空間地図と時間軸をそこに配した。さらにナイジェリアの Ben Okri は *The Famished Road*(1993)を発表し、イングランド社会小説に慣れた英語圏読者を驚かせ、重要な文学賞であるブッカー賞を受賞した。描かれているのは、適応という主題でも、独立という主題でもなく、土地の呪縛からの解放という第三の主題だ。近代は、一方で「道」として表象されつつ、他方で、その「道」自身が近代を否定する存在としても提示される。イングランドの作家たち、そしてナイポール、シン、オクリの三人の小説に見られる近代表象の違いは、それぞれの地域と時代の特徴を著しく反映している。ナイポール研究、オクリ研究でそれぞれの近代観研究に一定の成果を見た現時点で、これを背景として、かつての英国最大の植民地インドにおいて近代化がいかに表象されたか、あるいはされなかったかを、クシュワント・シンの作品を通して研究するというのが本研究の位置付けである。

２．研究の目的

研究代表者の近代表象研究の出発点はヴィクトリア朝の社会小説である。この作品群を、一方で模倣しつつ、他方で超越しつつ、発達したのが旧植民地の小説群だ。我が国では、ヴィクトリア朝の社会小説研究については、研究代表者がこの分野の研究に入った 1970 年代以来、著しい進歩を遂げた。他方、現存作家が対象となる旧植民地出身の作家研究は、ナイポール、オクリともに、まだその全体像の紹介段階にある。ナイポールに関しては主要作品でノーベル文学賞受賞の契機ともなった *A House for Mr Biswas* の翻訳がいまだ成っておらず、オクリに関しては、代表作『飢えたる道』に続く、三部作の第二作と第三作の翻訳が成っていない。シンに関しては、そのインドにおける重要性にもかかわらず、『デリー』の翻訳が 2008 年に出版されたばかりだ。こうした作品の紹介自体も当該国の文化理解の深化につながるが、ここにそれぞれの作家の、それぞれの国における近代化の過程の表象のかたちの解明という個別の主題を設定することで、理解はさらに具体的になる。たとえばナイポールの『中間航路』という紀行に、トリニダードの住人は、自分たちを「モダン」だと考えていたという記述があり、「モダンであるとは、絶えず注意をおこたらないこと、変化への意志、映画や雑誌や漫画がアメリカ的なものとして示すものを、積極的に受容する態度を意味する」とある。ナイポールの描くトリニダードでは、「アメリカ的なもの」が近代の指標であり、近代と現代は限りなく重なる。ナイジェリア出身のオクリにおいては、近代はビアフラ戦争以降となる。しかしこの近代は、イングランドやトリニダードの一部の例のように直線的には進まない。近代表象は大きな主題であるからこそ、具体例をひとつひとつおさえていくという小さな蓄積を必要とする。近代を一般に明治時代以降とみなし、モダニズムの時代を 1920 年代から 30 年代とみなす日本の現代から見たこうした近代の確認は、世界における近代化の波が場と時間ごとに差異を生みつつ浸透していくという具体的事実を浮かび上がらせる。インドの世界を描くシンの近代は、イングランド、トリニダード、日本のそれよりはるかに複雑な様相を呈する。ナイポール研究、オクリ研究を踏まえ、シンを今回中心に据えた理由は、三つある。第一は、イングランド的近代を模倣超越したかに見えるナイポールが『インド:闇の領域』、『インド：傷ついた文明』、『インド：新しい顔』というインド三部作でイングランド的近代とインドとを総合的に把握しえなかったのに対し、シンがそれを成しえたという事実がある。なぜそれが可能であったかという点につき、*A Train to Pakistan*、 *Delhi*、*Burial at Sea* の三作を中心に明らかにする。第二は、シク教徒としてのシンの立場がインドにおいて微妙な位置にあるという点である。作品がそれをどのように映しとっているかを明らかにする。第三は、1950 年代生まれの *A Suitable Boy* を書いた Vikram Seth や *A Fine Balance* を書いた Rohinton Mistry が、あたかも揺れ戻しのように、イングランド的社会小説をもってインドを描いたのに対し、シンは *Burial at Sea* で、作中人物にまず前近代を経験させ、続いて近代を、最後にまた前近代を経験させているという事実がある。このシン独特の回帰の意味を明らかにする。本研究の独創性は、クシュワント・シンの作品の独創性を近代表象のありかたという点から解明することにある。『デリー』に関しては、そもそも近代的要素と前近代的要素の混在する現実のデリー世界を、シンがいかに近代読者にも理解可能なかたちで描き出し、なおかつその背後にある前近代性をも暗示しえたかを着眼点とする。したがって、その出発点となるのは、都市、遺跡、廃墟、霊廟、

バザール、カフェ、図書館、家、川、作中人物たちの訪問地といったさまざまな場、具体的にはビルラ・ハウス、タージ・マハル、フマユーン廟、レッド･フォート、クトゥブ・ミナール、コンノート・プレイスといった土地、インディラ・ガンディー、ネルー、ガンディー、アウラングゼーブ、ティムールといった人名、バーグマティ、ブード・シンといった架空の人名、飛行機、車、ラジオといった近代の指標としてのもの、アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、ペルシャ人といった外国人、語り、引用、金言、詩、小説への言及の欠如といった言葉にかかわることがらなどであるが、そこから、生と死、性、貧困、富、結婚、家系、少年、父と息子、主人と奴隷、宗教、政治、戦争、移動、侵攻といった普遍的テーマ、さらに砂嵐、グル、残忍さ、駆け引き、笑いなど、ありきたりの分類にはおさまりきらぬものの分析へと、研究を進めてゆく。『パキスタン行き列車』に関しては、宗教的対立の折り合いをいかにつけるかというテーマに若き日のシンがどう取り組んだかを明らかにする。『水葬』に関しては、ネルーの次にガンディーに愛された男という設定の主人公が、インド前近代社会を出て、イギリス近代を経験ののち、インドの近代化に尽力したものの、最終的にはそれを捨て、インド的前近代に戻る過程を検証することで、シンにおける前近代・近代表象の特徴を探る。以上のシン研究を、これまで蓄積のイングランドの社会小説研究、ナイポール研究、オクリ研究と比較対照することで、それぞれの地域と時代における近代表象の特徴を明らかにする。社会小説はそれぞれの地域の近代を、ある時は同時的に、ある時は時差をともなって、表象し、近代化の終焉とともにその一定の役割を終える。イングランドの社会小説研究が歴史研究に傾くなか、トリニダード、ナイジェリア、そしてインドの社会小説研究は、同時代の出来事の表象を追うことで、それぞれの互いに対する指標としての役割を顕在化させ、近代表象という行為の特質を相補的に明らかにしうると予測される。

３．研究の方法

本研究は、これまで蓄積したV.S.ナイポールとベン・オクリのテキストに現れる近代とクシュワント・シンに現れる近代とを比較研究するものである。したがって、三作家について順次、研究を進め、それを統合することが研究計画の中心をなす。以下、三作家についての研究および近代論についての研究の四項目に分けて、研究計画と方法を記述する。V.S.ナイポールを 2010 年度に、ベン・オクリを 2011 年度、クシュワント・シンおよび三作家の統合を2012年度に割り振る。

(1) 2010年度

V.S.ナイポール研究は2006年度から2008年度までに行なった科学研究費による研究（インド系英語作家による自伝的小説の比較研究）を土台としている。そこでは、トリニダードの作家V.S.ナイポールを中心に据え、テキストを丹念に検証し、問題群の抽出を試みた。なかでも際立って重要な主題は、この作家の近代観である。『ビスワス氏の家』はトリニダードの独立をビスワス氏個人の独立に重ねあわせたトリニダードを舞台とする社会小説であった。その後、V.S.ナイポールは、いわばイングランドのモダニズム的世界に身をおき、拠点をイングランドに移す。その生活の集大成が『到着の謎』として結実し、V.S.ナイポールは第二の作風を確立する。しかし、作家はそこに留まらず、旧植民地世界を移動することで、秀逸なルポルタージュを残す。第三の作風である。そこからさらに『世の習い』を書き、空間的移動と時間的移動の両者を一作品において実現する。第四の作風である。ここには近代のみならず前近代や後近代が混在する。そのため近代という用語が再考を迫られることになる。2010年度は、四つの作風に整理される V.S.ナイポールの作品のなかから、特に『世の習い』という複数の時間軸を持つ作品を検討し、近代の複数のかたちをあきらかにする。『世の習い』こそ、クシュワント・シンの『デリー』のカリブ海版といった様相を呈しているからだ。テキストの精緻な読みはすでに終了しており、研究業績に示したとおり、作品論はかなりの程度完成している。そこで 2010 年度は批評書の読解に重点をおき、ベン・オクリ、クシュワント・シンのみならず、他のインド系の作家との比較も視野に入れる。

(2) 2011度

ベン・オクリの近代は、初期のリアリズム的作品にその典型が見られる。しかし、オクリの作品の真価はマジック・リアリズム的作品にあり、その代表作が『飢えたる道』以下の三部作である。ここでは、主人公の少年個人の成長の物語としての近代現象とナイジェリアの独立という近代現象が同時並行的に提示される。それが「道」という表現に凝縮されているが、一方、その道は、ただ単に目的地を持ち、前へと進む道ではなく、住人を喰らいつくすおそろしい、非近代的な道でもある。ここではオクリの両義的近代の特質を、具体的な作品に沿って検証する。これもすでに作品論を用意する段階に達しており、批評書などの読解を視野に入れながら、研究を進める。

(3) 2012年度

前二作家については、それぞれ全体像の把握が終了しているが、シンについては未読の作品もある。社会小説については『パキスタン行き列車』、『デリー』、『水葬』を中心に据えつつ、その周辺にある作品の整理に努める。評論についても、一作品ずつ検証し、シンの近代観を明らかにする。特に、インドの英字新聞等に発表のコラムなどの収集と読解に力点をおく。『デリー』において明らかなように、シンの近代観が直線的なものでないことは明らかだ。近代を検証しつつ、その枠組みからもれる部分を柔軟に捉えることが本研究成功の重要な鍵と認識している。インドの歴史、政治、社会、宗教、教育などさまざまな分野の文献を渉猟することでシンの世界を理解する助けとする。

三作家の近代観の具体例を追う作業は、近代論一般に対する理解と並行して進められなければならない。近代論をめぐる文献の収集と読解が、この作業の中心をなす。近代論に内包される近代文学論、現代文学論、さらに近代小説論、現代小説論をひろく渉猟の上、いまだ整備されていないV.S.ナイポール、ベン・オクリ、クシュワント・シンの近代観と既存の近代論との結びつけをはかりたい。社会小説というジャンルが、近代化の過程にある特定の時代の特定の地域に移動しつつ発達したという仮説に基づき、この点を三作家の具体的作品を中心に明らかにする。

V・S・ナイポールのトリニダードは、もともとイギリスの植民地でありながら、その地理的条件からアメリカの多大な影響下にあった。石油の産出も、「モダン」な世界の到来を助けた。日本にも「モダニズムの時代」があった。このモダニズムはひとつ東京のみならず、各地などの大都市でも花開き、時空への目配りを研究者に求める。一方、V・S・ナイポールが一時あこがれたイギリスのモダニズムがあった。ジェイムズ・ジョイス、ヴァージニア・ウルフ、D・H・ロレンス、グレアム・グリーンなどを参照しつつ、イギリスのモダンと日本のモダンの時差の検討が課題となる。モダンな人々が登場するところに小説は栄える。V・S・ナイポールは『神秘の指圧師』や『ビスワス氏の家』で、トリニダードを舞台に、そのあたりの感覚をうまくとらえた。ベン・オクリは、少年アザロの目を通して、ナイジェリアを舞台に、新たなモダンを提示した。クシュワント・シンは、上記すべての近代観とは別の近代観に基づいて、現在に過去を挿入していくという手法でデリーという都市を描いた。

およそさまざまな作品に現われる近代表象を精査し、それぞれを相対的な位置におき、それぞれの特質を明らかにすることが研究の三年目に当たる 2012 年度の最大の課題となる。近代論一般と個別作家の近代観との往復によって、既存の近代観にない、新たな近代を提示してゆく。

４．研究成果

(1) 2010 年度

当年度には、共著一点と書評一点を出版した。共著の論文「自然が救うギャスケルの男性たち」では、19 世紀にイギリスがいよいよその植民地政策を世界に展開する段階で、自然科学者（博物学者）たちが、意識するか否かにかかわらず、いかなる役割を演じたかを、ギャスケルという一見するとイギリス国内のことにのみ関心があったと見えかねぬ作家の目を通して検証し、かれら自然科学者たちの視線のありようと、かれらの目に映った踏査地の姿を検証した。その数々の踏査地の横並びとしてあったのが、本研究のトリニダードであり、ナイジェリアでありインドであった。さらに、ロイド・ジョーンズ／大友りお［訳］）『ミスター・ピップ』という現代小説の書評を行った。これは現代とディケンズの時代を往復する独創的な作品で、ディケンズが位地を占める宗主国的中心と作品中の一読者の占める植民地的周縁という図式が、双方の位置関係を浮かび上がらせるもので、本研究にも宗主国と植民地の時空間上での扱いという観点からさまざまな示唆を与えた。当年度の中心テーマであるナイポール研究については、ナイポールが大学入学以前までを過ごしたトリニダード時代、オックスフォードとロンドン時代、インドなどの旧植民地を訪問する時代、イスラム世界を始め世界各国を訪問する時代と大きく分け、それぞれの地域におけるそれぞれの近代が作品にいかに反映されているかを検証した。個別作家でここまで版図の広い作家も稀有であり、その作品を検証することが、そのまま本研究の独創性につながった。さらにナイポールを契機としての上記以外の各地域の近代の姿も浮かび上がり、およそ世界にある複数の近代の特定につながった。

(2) 2011 年度

まず橋本槇矩氏（学習院大学教授）と共編著書『現代インド小説の世界』を編集した。研究代表者はそのなかで「いつのまにか非近代にのみこまれる近代について」という論文を執筆。本研究の中心をなす作家クシュワント・シンの『デリー』と『水葬』について詳細に論じた。特に『水葬』を扱った箇所では、そこに現れるイギリスおよびインドの近代表象を詳細に扱った。編集の過程で他の執筆者の扱う作家にも目を配ることになり、それらの近代表象についても考察を深めた。勤務先文化科学研究所からは共著書『多元を生きる』を出版した。ここで研究代表者は「ジャンルの多元性と詩的言語の領分」と題する論

文を発表し、シンの『デリー』のなかで、真の詩人と断定しうる作中人物をバーグマティと特定し、その理由を考察した。グローバル化のなかで、その表現も定着した英語文学については、木村茂雄／山田雄三編『英語文学の越境』を『WEB 英語青年』で、入子文子編『英米文学と戦争の断層』を『図書新聞』で、またさらにひろいポストコロニアリズムというテーマについては常田夕美子著『ポストコロニアルを生きる』を『図書新聞』で書評した。いずれの著作も、その参考文献とともに本研究にさまざまな刺激を与えてくれた。他方、いわゆるイギリスの伝統的作家たちの作品についても、目配りを怠ることのないよう、冨田成子著『ジョージ・エリオットと出版文化』およびアナ・K・ナード著／辻・森・村山訳『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』を『WEB 英語青年』で、ジェイン・オースティン著中野孝司訳ジェイン・オースティン作品全 6 冊（ちくま文庫）」の書評を『図書新聞』「ネット読者書評欄」で、ジョゼフ・コンラッド／柴田元幸訳『ロード・ジム』を『WEB 英語青年』で書評した。当年度の中心テーマであるベン・オクリ研究については、初期から後期に至るまですべての作品を俯瞰し、それぞれの作品内の近代につき検証した。オクリにあっては、初期作品『飢えたる道』にその近代表象の独創性があり、後期に向かうにつれ、『アルカディアにて』などに見られるように、近代、移動、到着といったテーマの深化に限界を見せる。ただしオクリがナイジェリアという個別の地域から出発し、生の此岸と彼岸の往還という世界普遍のテーマにはやくから到達しえた点は、作家の独創性を示してあまりあるところで、この点の解明に焦点をあてた本年度の研究は、二十一世紀文学の近代表象を考察するうえで、貴重な成果を生んだ。

(3) 2012 年度
勤務先文化科学研究所から共著書『ヨーロッパ文化の光と影』を出版。「近代のはざまの〈完璧な一日〉」という論文を寄せた。ここでは、近代東京に生きる人々を活写した文章を検討し、日本における近代の現れ方を見た。また、高本孝子他編『新世紀の英語文学』を『図書新聞』で書評した。これは 21 世紀の英語圏の小説の見取り図を提示するもので、本研究の位置付けにたいへん有益であった。当年度の中心テーマであるシン研究については、『デリー』や『水葬』の継続的読解を通じ、インドにおける近代表象のひとつの到達点を確認した。これは、現代と過去を交錯させるという『デリー』の構成によく現れているところで、現在と過去の相対化、目の前の事件と歴史上の事件の相対化、ひいては、各個人の近代観および歴史観の相対化につながるものである。ナイポール、オクリとそれぞれの近代表象は、結局のところ、シンという歴史を現在のなかに取り込む作家において頂点にいたる。各作家において複層化された近代はそれぞれの作家の独創性を示す。それら個別の近代の比較から、二十一世紀の現実の事象、作品の中の事象の数々を解き明かす手立てが得られた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
①書評（ロイド・ジョーンズ／大友りお[訳]）『ミスター・ピップ』、<u>栂　正行</u>、ディケンズ・フェロウシップ日本支部『会報』、査読有、第 33 号、2010 年、91-93 頁。

〔図書〕（計 5 件）
① 武井暁子、要田圭治、田中孝信編、<u>栂正行</u>他 音羽書房鶴見書店,『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』, 2013, 185-213 頁
② 中京大学文化科学研究所編、<u>栂　正行</u>共著　勁草書房、『ヨーロッパ文化の光と影』、2012、135-157 頁
③ 中京大学文化科学研究所編、<u>栂　正行</u>共著　勁草書房、『多元を生きる』勁草書房、2011 年 1 月、87-92 頁
④ 橋本槇矩、<u>栂正行</u>編、鳳書房,『現代インド英語小説の世界―グローバリズムを超えて』, 2011 、164-83 頁
⑤ 日本ギャスケル協会編、<u>栂　正行</u>共著、大阪教育図書、『エリザベス・ギャスケルとイギリス小説の伝統』2010、143-152 頁

〔その他〕
ホームページ
http://kenkyu-db.chukyo-u.ac.jp/show/type10.php?c=87119

雑誌記事
①書評（ジョゼフ・コンラッド／柴田元幸訳）『ロード・ジム』<u>栂　正行</u>、『WEB 英語青年』、査読有、2011 年 10 月、30-32 頁.

②書評（冨田成子）『ジョージ・エリオットと出版文化』および（アナ・K・ナード著／辻・森・村山監訳）『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』、<u>栂　正行</u>、『WEB 英語青年』、査読有、2011 年 7 月、35-37 頁.

③書評（木村茂雄／山田雄三編編）『英語文学の越境』、<u>栂　正行</u>、『WEB 英語青年』、査読有、2011 年 4 月, 41-43 頁.

④書評（高本孝子他編）『新世紀の英語文学』
栂　正行、『図書新聞』、査読有、2012 年 1 月 26 日.

週刊新聞記事
①書評（ジェイン・オースティン）「中野孝司訳ジェイン・オースティン（ちくま文庫）」、「ネット読者書評欄」、栂　正行、『図書新聞』、査読有、2011 年 9 月 28 日.

②書評（常田夕美子）『ポストコロニアルを生きる』、栂　正行、『図書新聞』、査読有、2011 年 9 月 3 日.

③書評（入子文子編）『英米文学と戦争の断層』、栂　正行、『図書新聞』、査読有、2011 年 4 月 16 日.

６．研究組織
(1)研究代表者
栂　正行（TOGA MASAYUKI）
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：10163958

(2)研究分担者 なし
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者　なし
（　　）
研究者番号：